

「ヘルンさん言葉」再考

—その特質とピジン性の検証—

金 沢 朱 美

1. はじめに

小泉八雲（帰化以前の名前ラフカディオ・ハーン Lafcadio Hearn。本稿では帰化以前の八雲の活動に言及するため、初回のみ八雲、次回からハーンにその呼称を統一する。）は、明治期に日本に在住した再話文学者、民俗研究者、日本古来の美の発見者及び紹介者として著名である。しかし、日常言語活動におけるその日本語は「ヘルンさん言葉」と呼ばれる独特の、一変種の様相を呈していた。

林（1984）はその注記においてハーンの日本語に言及し、「日本では、彼の表現を借りれば『ハーン方言』という一種の『ピジン日本語』しか用いることができず・・・」と述べている¹⁾。稿者も金沢（2000）において別のアプローチから、ハーンの前日本語はピジン日本語であるという結論に至った。しかし、一言でピジン日本語といっても例えば「Yokohama Dialect」²⁾（以下Y D）と比較してもその質や程度には著しい差がある。そこで本稿では「ヘルンさん言葉」がどの程度のピジン性を有しているのか、「ヘルンさん言葉」のどのような面にピジン語としての特徴が見られるか、管見に入る記録に残るハーンの使用した語彙のうち、活用語と助詞を中心に語彙を調査することにより、「ヘルンさん言葉」の再考を試みその特質を探り、ピジン性の検証を試みた。更にピジン化の要因の一つとしてハーンの前外国語習得論を考察した。

ここでピジン語の定義を確認しておきたい。ロレット・トッド（Lorero Todd, 1986）によると、

…ピジンとは、共通語をもたない人々の間に起こる、ある限られたコミュニケーションの必要を満たすために生まれる周辺的な（marginal）言語である。接触の初期の段階においては、思想の詳しい交流を必要としないやりとり、そして、ほとんど1つの言語だけから選ばれる、少数の語彙で充分足りるような取引に限られることが多い。そのようなピジンの統語構造は、接触した言語の構造よりも簡単で、適応性も少ない。また、ピジンの特徴の多くは、接触言語の語法を反映することは明らかであるけれども、ピジン固有の特徴も多い。（中略）主語と述語の一致は存在しない。名詞も動詞も語形変化をしない³⁾。

とあり、ピジン化された言語は標準変種（standard variety）の本質的でない特徴を捨て

去っていると説明している。

2. ハーンならびにセツの書簡と『思ひ出の記』に見られる「ヘルンさん言葉」

第一書房『小泉八雲全集』別巻（昭和2年、1927）にはハーンの手紙が21通公表されているが、これらはハーンの次男稲垣巖により大幅に修正されており、ビジン性の特徴を示す部分が失われている。1980年までに原文のまま公表された手紙は1通しかなく、八雲が玉木光栄に宛てたものである。1980年代に原文手紙が数通公開された。しかし、2000年代になってもハーンの手紙は巖や三成重敬によって修正されたものが紹介されることが多い⁴⁾。それら修正手紙ならびに原文手紙及び『思ひ出の記』に現れる「ヘルンさん言葉」に対する先人の解釈は上述の林を除き総じて「片言」である⁵⁾。なかで萩原朔太郎は詩人らしい解釈をしている。

…ヘルンの奇妙な言葉を、真に完全に理解し得たものは、彼の妻より外にはなかつた。さういふ場合に、妻もまたヘルンさんの言葉を使つて応答した。二人の仲の好い成人が、子供の片言のやうなことをしやべり合つて、何時間もの長い間、笑ったり戯れたりして居る風景こそ、おそらく真にフェアアイランド的であつたらう。さうした夫婦の会話は女中や下僕には勿論のこと、子供たちにさへもよく解らなかつた。「内のパパとママとは、だれにも解らない不思議な言葉でだれにも解らない神秘のことを話している」と、学校へ行つてゐる男の子が、自慢らしく仲間の子供に語つたほど、それは奇妙な別世界の会話であつた⁶⁾。（下線稿者）

本稿では「ヘルンさん言葉」は単なる片言ではないとの解釈に基づき、原文手紙6通（1904年8月10日付、同8月13日付、8月15日付、8月18日付、8月19日付のセツ宛手紙及び同年焼津滞在中の玉木光栄宛手紙ならびに『思ひ出の記』に現れるセツによる記憶のなかに保存された「ヘルンさん言葉」を考察する。ハーンの手書きことばの実際を知るために写真版から1通をここに紹介する。（句読点も原文のまま。）1904年8月15日付け焼津より東京の妻セツに宛てた手紙である。

資料A

小・カワイ・ママ・サマ・

サクバン・ゴウグワイ・アリマシタ・オキナ・カチ・イクサ・ノ・カワ
ツタ・デ・ワタシラ・ワ・マツリマシタ・コリ・ト・ラモ子・デ・シカシ・モ・
カワツタ・アリマセン・ コンニチ・ワ・ナミ・スコシ・オ・ト・クラギ・ア
リマス・かづを・ト・ニイミ・ト・ワタシ・サシマシタ・ハヤイ・ナオシマシタ
シカシ・クラギ・ワ・オモシロイ・ナイ・ サクバン・ウンド・シマシタ・
ヤマトダケ・ノ・ミコト・ニ・タヅ子・シマシタ・ト・クロトンボウ・ヲ・ツカ
ミマシタ・ ノミ・ガ・クウ・シカシ・タクサン・カ・アリマセン・ コド
モ・ヨロコブ・オトキチ・サン・ウミ・ニ・アサ・トモ・シマス・ ワタシ・

オモウ・イワオ・ハヤイ・オヨグ・マナビマシヤウ・シカシ・コドモ・ノ・マナ
ブ・ムツカシイ・コノ・ナミ・デ・アル・トキ・ニ・　　ワダ・ニ・ユク・ノ・
ミチ・タクサン・コワシマシタ・　　マダ・ワダ・ニ・マイリマシタ・ナイ・シ
カシ・モ・スコシ・ユキマシヤウ・　　オホゼミ・ウタツデ・デゴザリマス・

やいづ 八月十五日

パパ・カラ・

小泉八雲 アバ・ニ・セツブン・パパ・カラ

大意

日露戦争の戦勝の号外が出て氷とラムネで戦勝を祝ったこと、今日は波が少し高く、一雄と新美と自分がくらげに刺されたが直ぐ治ったこと、昨晚、倭建命を祭る焼津神社にお参りしたこと、黒トンボを捕まえたこと、蚤に食われたが蚊はあまりいないこと、乙吉が朝、海へ子どもの供をしてくれること、波が高いので子どもの水泳の練習は難しいこと、和田浜へ行く道路が決壊して今回はまだ行っていないこと、蟬の声に聞き惚れていることなどを伝えている。

資料Bは1904年8月12日にセツがハーンに宛てた書簡である。写真版から転写する。(句読点も原文のまま。)

資料B

グド、パパサマ、アナタ、ノ、カワイ、テガミ、3トキ、ワタシ、ノ、テニ、アリマシタ、ヨロコビデ、ワライマシタト、セツブン、シマシタ、ヤイツノ、テイボヲ、ノ、エ、オモシロイデス子一、ヨキテンキデ、テン、~~子キイデス~~ノイロキレーデス子一、TOKYO オナジ、マイニチ、アツイ、デスヨ、かづを、タクサン、ヨロコビ、デ、オヨギ、スル、ト、キク、ワタシ、オナジ、ヨロコビデス、スコシ、水、オソレル、フカイノ、トコロ、タクサン ヨロシ、デス、アブナイ、アリマセン、　　イワオ、オナジ、ヨロコブ、デ、シヤウ、大キ、ワラウ、デスカ、マタハ、ナク、デスカ、パパサマ、フタリ、小ドモ、オシエル、タクサン、シゴト、ゴシンパイ、デス子一

パパサマ、スコシ、ブシヤウ、ト、カキマシタ、シカシ、ジヤウブ、タクサン、ヨロコブデス、アマリ、タクサン、ウミ、ヨクナイデス、シカシ、ウミノ、カゼ、タイソウ、クスリ、デス、ト、キザワサン、カラ、キキ、マシタ、パパサマ、ブシヤウ、ヨロシ、デス、タダ、カワイ、ノ、ダイヂノ、カラダ、カワイカル、ダイヂ、スル、クダサレ、やいづノ、サカナ、サシミ、サケ、イカガデスカ、パパサマ、ワルイ、シンパイ、スル、ヨクナイデス、カワイ、ママ子ガウ、ト、子ガウ、デス、チカイ、ニ、シヤワセ、マイリマス、ゼヒデス、イエニ、ミナ人、大ジヤウブ、デス、キヨシ、オトナシデス、ケンクワノ、トモダチ、ルスデス、ミナマ、キレイ、デ、ゴミ、アリマセン、スズコ、スワルノ、カタヂ、デ、5シヤ

ク、アルキマスヨ、カワイカワイデスヨ サヨナラ
オババサマ ヨロシク ト イイマシタヨ
パパサマ

ママカラ

大意

手紙を受け取ってとても嬉しかったこと、ハーンが描いた堤防の絵が面白いこと、気候のこと、息子の一雄と巖の水泳練習のこと、海の風は健康にいいと（お医者）木沢さんから聞いたこと、体に気をつけてほしいこと、焼津の食事のこと、留守宅の家族の消息などを伝えている。

一方話しことばの方は、松江に来た直後から逝去直前までの「ヘルンさん言葉」が小泉セツ『思ひ出の記』他に保存されている。セツの記憶のなかに保存されていた「ヘルンさん言葉」であるから、セツによる無意識の修正はもちろんあると思われるが、相当の部分で実際にほぼそれに近いことばが話されていたと考えられる。資料Cの a、c、e、g、い、えはハーンの話しことばである。

資料C

- a. 面白いのお寺。ママさん、私この寺にすわる、むつかしいでせうか。
- b. あなた、坊さんでないですから、むつかしいですね。
- c. 私坊さん、なんぼ、合わせですね。坊さんになるさへもよきです。
- d. あなた、坊さんになる、面白い坊さんでせう。眼の大きい、鼻の高い、よい坊さんです。
- e. 同じ時、あなた比丘尼となりませう。一雄小さい坊主です。如何に可愛いでせう。毎日経読むと墓を弔ひするで、よろこぶの生きるです。
- f. あなた、ほかの世、坊さんと生れて下さい。
- g. あゝ、私願ふです。
- あ. あなた、自分の部屋の中で、ただ読むと書くばかりです。少し外に自分の好きな遊びして下さい。
- い. 私の好きの遊び、あなたよく知る。ただ思ふ、と書くことです。書く仕事あれば、私疲れない、と喜ぶです。書く時、皆心配忘れるですから、私に話し下され。
- う. 私、皆話しました、もう話持ちません。
- え. ですから外に参り、よき物見る、と聞く、と帰るの時、少し私に話し下され。ただ家に本読むばかり、いけません。

3. 「ヘルンさん言葉」の用語ならびに統語法の考察

上に掲げたようにハーンは日常生活の話しことばでも polite style を用いていたことが

窺え、文体上書きことばとの間に助詞の使用の有無以外は差異がないことから語彙調査の結果を一括して考察する。必要に応じて両者を分けて考察した。「ヘルンさん言葉」の特質とピジン性を探るためここで取り上げたのは、動詞、イ形容詞、ナ形容詞の特徴的な用語遣い、助詞の使い方、造語した接続詞「と」、特徴的な使い方の単語である「あなた」、「なんぼ」、英語（構文ならびに表現）の干渉についてである。原文がカタカナ表記である書簡中の文章例はカタカナ表記で、原文が漢字かな交り表記である『思ひ出の記』中の文章例は漢字かな交り表記とした。語例は全て漢字かな交り表記とした。

3.1 動詞について

書簡ならびに『思ひ出の記』に現れる動詞の異なり語数は約 145（延べ語数約 393）である⁷⁾。サ変動詞はそれを合成する名詞と共にそれぞれを 1 語と数えた。特徴的に使われている動詞は、サ変動詞延べ出現回数（以下同じ）37 回、ある 27 回、参る 19 回、（～と）なる 13 回、喜ぶ 13 回、思ふ 13 回、申す 7 回、よろす 2 回、のくう（温う？、退くう？）1 回等である。

異なり語数 145 のうち、サ変動詞は 31 を占める。心配する、勉強する、退治する、行水をする等の標準的な語法の外、自身でも造語をしてサ変動詞を有効に使っている。例えば「かね・する（稼ぐ）」「たづね・する（訪ねる）」「はた・する（旗を立てる）」等である。

「ある」は人の存在、物の存在共に用いている。他にも「届く」「着く」「出る」「言う」「持っている」等の動詞の代用をしている。Y D と呼ばれたピジン日本語においても「ある」は Y D の核をなし、「to have」「will have」「has had」「can have」「to obtain」「to be」「to wish to be」「to be at home」「to arrive」「to want」等、多くの動詞、動詞句の代用をし、万能語として機能した。「ヘルンさん言葉」においても「ある」は多くの動詞の代用をしているが万能語としてまでは機能しておらず、「ある」の一語の使い方においてだけでも Y D よりも「ヘルンさん言葉」のピジン性が薄れていることが窺える。

「参る」「くだされ」「ござる」等はハーンが好んで用いた丁寧な表現である。「ヘルンさん言葉」は士族出身の妻セツの松江ことばの影響が大きかった筈であるが、八雲のことばが上品で、「参る」の頻用が見られるのはその影響と考えられる。「来る」「行く」「帰る」「届く」「（続編が）仕上がる」「病気になる」「痛みが襲う」等の意味で「参る」を多用している。「くだされ」は資料 C のい、えのように好んで使っている。セツは「大きい、蛇家の中に参りました」「願ふ、早く参りて下され。子供、皆、待ち待ちです。」のように使っており、これらの語はセツの影響によると思われる。

「（～と）なる」については、ハーンは形容詞、形容動詞の活用を習得しておらず連用形の代替として、ならびに名詞の後に付いて変化の結果を示す格助詞「に」の代替として用いた。「小さいとなる」「嫌ひとなる」「比丘尼となる」等である。『思ひ出の記』に「寒くなる」「寒くなって来ました」「見えなくなる」「3 年になる」「坊さんになる」のように連用形や変化の結果を示す格助詞「に」の使用が 5 例見られるが、上記の通り

「～となる」は13回(異なり語数12)見られ、書簡の8例は全て「～となる」であることから、『思ひ出の記』に見られる上記「～くなる」「～になる」の5例はセツの記憶のなかで変化したものであることが考えられるのではないか。

「喜ぶ」の使い方も一つの特徴をなしている。字義通りの「喜ぶ」のほかに、「樹切るより如何に如何に喜ぶでした。」「この家に住む事永いを喜びます。」「(あなた)悲しむ、私喜ぶないです。」のように、「良い」「嬉しい」「楽しい」等の形容詞の代替や「希望する」等の動詞の代替として使われている。セツによる長男一雄宛の標準口語の書簡にも「…と、新美さんからの手紙で知りました、おれにも、よろおびます。」というくだりがあり、「喜ぶ」の使い方にもセツの影響が見られるかもしれない。

「よろす」について、ハーンは「よろしくする」「よくする」「済ませる」等の意味で用いるために「よろす」を造語した。「よろしました」「よろしましょう」と活用させている。

自動詞と他動詞の使用にも混同が見られ、例えば「治る」「壊れる」「通る」のように自動詞を使うべきところに「治す」「壊す」「通す」のように他動詞を慣用している。

「のくう」については、形容詞の「のくい」(「温い」だと思われる。稲垣巖が修正をしている。)と関連があるかもしれない。書簡には「アナタ・マイル・ノ・トキ・テンキ・ガ・キレイ・ト・ウミ・ガ・ノクウ・ト・オモウ」と使われている。「のくう(温う)」とするとハーンの造語でその動詞化であろうか。「のくう・と・なる(温うとなる)」のつもりで書いたのかもしれない。あるいは「のくう(退く)(う)(遠浅になる)」か。そうであれば長音になっているのは松江ことばの影響であろうか。(一なんぼ一の項を参照されたい。)

動詞の運用はピジン性を強く示している。その運用の仕方には2通りある。1つは活用が無く、全てdic.formを用いる。(経を読んで墓を弔って→経読むと墓を弔いするで、見て聞いて帰ってから→見ると聞くと帰るの時、学びやすい→学ぶやすい等)もう1つはmasu formの使用である。『思ひ出の記』を見ると、日常生活においても常にpolite styleで話していたことが窺え、masu formは習慣的に習得していたようであるが、masu formの体系とは別に「dic.formです、dic.formない」の体系を創っていた(歩くです、愛するです、喜ぶない、切らない等)。傾向として「dic.formです、dic.formない」の形は『思ひ出の記』に多く見られ、書簡には「マイリマス・ナイ」「マイリマシタ・ナイ」のように「masu formない」が見られる。

3.2 イ形容詞について

イ形容詞は異なり語数で45(延べ語数169)現れており、数としては決して少なくない。そのなかで特徴的に使われているイ形容詞は、面白い21回、よい19回、小さい14回、かわいい12回、よろしい8回、のくい(温い?)1回である。

「面白い」は興深げなあらゆる良いと思われることに使われている。「面白いのお寺」「面白いの家」「面白い、隠岐の島で(家を)建てませう。」「キヤク・ヨヨ・イツテシマイマ

シタ・オモシロイ」「クラギ・ワ・オモシロイ・ナイ」「オモシロイ・ママ・サマ・ニ」等である。

「小さい」や「かわいい」が書簡に多いのは、ほとんど全ての書簡で冒頭が「チサイ・カワイ・ママ・サマ」から始まっているからである。原文書簡の公開が進めば「面白い」「小さい」「かわいい」等の形容詞の延べ出現回数が増えることは間違いのないところであろう。書簡の末尾は「～によろしく」とするところを「～ニ・カワイ・コトバ」のように「かわいい」が使われている。ハーンは「小さい」「かわいい」が気に入りのことばだったらしく、書簡で子どもや動物の描写をするときには何度も「小さい」「かわいい」を使っている。

「のくい」はぬくい（温い）と考えられる。「ノクイ・デシタ」は稲垣巖によって修正された書簡に「温いでした」とある。原文には「コンニチ・アサ・ウミ・ニ・オヨギマシタ・ノクイ・デシタ・ト・オモシロイ」とある。

イ形容詞は長音の欠落の顕著な傾向、活用の無いのが特徴である（大きい→おき、寒くありません→寒いありません、新しいもの→新しもの等）。連用形の代わりに結果を示す格助詞「と」が頻用される。なかで「おきく（大きき）」のように活用させている例もあるが、それも「と」で受けており、「と」の使用には明確な体系性が見られる。長音表記の欠落の顕著な傾向から、「ヘルンさん言葉」は英語話者の特徴を示しているだけでなく、その日本語は耳から得たことばがほとんどであったことを示していると思われる。

3.3 ナ形容詞について

ナ形容詞は異なり語数で25（延べ語数58）使用している。頻用しているナ形容詞は、好き7回、上手7回、かわいそう6回、気の毒5回、大丈夫4回で、ハーンは身体の不自由な人や子ども、小動物を頻繁に話題に取り上げている。「気の毒」や「かわいそう」はハーンの人柄をよく表している単語である。「かわいそう」を「かわいい」の意味で使っている例も見られる。ナ形容詞の連用形の代わりに並列や結果を示す格助詞「と」が頻用される（利口で親切で→利口と親切と、嫌ひになりました→嫌ひとなりました等）。

3.4 助詞について

助詞の脱落もピジン性の強弱を示す重要な鍵であるため、ここでは書簡における係助詞「は」、格助詞「が」、「を」、「で」、「に」の使い方を中心に調べた。話しことばの性質上、『思ひ出の記』は調査しなかった。格助詞「の」は関係代名詞的に使う誤用を除き、連体修飾の場合は書簡でも『思ひ出の記』でも標準日本語的に使われていた。

係助詞「は」（叙述の題目、取りたて提示）の欠落：43回

格助詞「が」（主語提示）の欠落：21回

格助詞「を」（動作の目的物提示）の欠落：15回（内、「に」で代替しているもの：5回）

格助詞「で」（動作の場所提示）の欠落：4回（4回とも「に」が代替している。）

格助詞「に」（変化の結果提示）の欠落：11回（内、6回は「と」が代替している。）

格助詞「へ」（方向提示）：全く使われていない。（全て「に」が代替している。）

係助詞「は」が適切に使われている回数：13回

係助詞「は」が不適切に使われている回数：3回

格助詞「が」が適切に使われている回数：5回

格助詞「が」が不適切に使われている回数：4回

格助詞「を」が適切に使われている回数：11回

格助詞「を」が不適切に使われている回数：2回（2回とも主語提示の「が」の代替として使われている。）

格助詞「で」が適切に使われている回数：5回（理由、手段として）

格助詞「で」が不適切に使われている回数：0回

格助詞「に」が適切に使われている回数：25回（方向、帰着点及び対象が19回、使役の対象が1回、存在の場所が2回、動作・作用の行われる時が2回、目的が1回）

格助詞「に」が不適切に使われている回数：10回（動作の場所「で」の代替として4回、動作の目的格「を」の代替として4回、通過の場所「を」の代替1回、不要の箇所1回）

以上の事実から叙述の題目や取りたてを示す「は」及び主語を示す「が」の欠落の顕著な傾向が見られる。「は」と「が」の混同も見られる。目的格「を」の欠落も多い。

（私は思う→ワタシ・オモウ、祭りがあります→マツリ・アリマス、からだを大事にする→カラダ・ダイジ・スル、日記を書く→ニッキ・カク、等。）ハーンの日本語が話しことば中心に習得されたものであることをよく示しており、多くの先人によって「片言」と評された所以もここに存するであろう。強いピジン性はこの助詞の欠落や不適切な使用によって見られるといえる。一方で「に」の使用は誤用も多いが、方向、帰着点、対象、存在、時等において相当に標準日本語的に使われていることが顕著である。方向を示す「へ」は全く使われていない。「に」の機能をかなり習得していたようであるが、一方「変化の結果」については全て「と」を使っている。「名詞・形容動詞語幹十に十サ変動詞」では「に」が全て欠落しており、「に」の機能の習得について顕著な偏向性が見られる。動作の場所を表す「で」は習得していなかったことがわかる。格助詞の「と」は多用されている。動詞、イ形容詞、ナ形容詞の活用を習得していないため、並列や変化の結果の「と」を使っている。（日記を書くことや字を書くことや手紙を書くことや英語を読むこと→ニッキ・カク・ト・ジ・ヲ・カク・ト・テガミ・カク・ト・エイゴ・ヲ・ヨム、等。）連体修飾の「の」は習得が容易だったようである。

3.5 接続詞「と」の造語について

接続詞は「しかし」20回、「ですから」5回他を使用している。順接を表す特徴的な語は「と」（10回）でハーンの造語した接続詞である。（副詞の「と」とは異なる。）「と」は、「そうすると」、「ですから」、「そして」、「それで」、「それから」等を意味し、頻用している。（お世辞を言いません。ですから いい男の人です。→お世辞ありません。と 可愛い男です。／朝分かれを告げます。それから 大学に参ります。→朝さよう

ならします。と 大学に参る。等。)

3.6 「あなた」について

ハーンは妻セツに対して常に「あなた」を使用している。時代は少し遡るが1831年頃にシーボルトが日本の妻タキへの書簡で、タキと娘イネのことを「おまへ」と呼んでいる⁹⁾ことと比較すると、同じように日本語の語彙が少ない外国人の夫でも、ハーンの方が丁寧で、待遇価値の高い、相手を尊重した日本語を使っているといえる。これは、それぞれ2組の夫婦における、夫と妻の身分上の差（セツは初めハーンの看病と身の回りの世話をするために雇われて、タキは知り合った後に遊女籍に身を置いて、それぞれの夫となる人と暮らした。）や時代背景を表しているというよりも、上掲の書簡から窺えるハーンの優しい人柄⁹⁾による、少ない語彙ながらことば遣いが繊細で上品な表現を好んだらしいことや、セツのことばの影響によるところが大きいと思われる。

3.7 「なんぼ」について

ハーンによる、松江ことばの「なんぼ」の使い方は特徴的である。「なんぼ」は書簡ならびに『思ひ出の記』に計10回出現しており、話しことばを取めた『思ひ出の記』には9回出ている。ハーンは「なんて〜だろう」「本当に〜だ」「とても〜にする」「どれほど〜だろう」のように「〜」を強調するために使っている。今日でも松江で「なんぼ」は使われているが、「いくら」の意味でしか使わないとのことである¹⁰⁾。

小泉凡氏によると、当時ハーンの家には常時10人以上の人々が生活を共にしていたそうなので、ハーン以外は皆松江、出雲出身の人々であったから、ハーンのことばには松江ことばが混じっていただろうとのことである¹¹⁾。「なんぼ」はその代表的なものであろう。ハーンは「なんぼ」が気に入っていたらしく頻用している。同氏によると、松江では語尾を伸ばして発音することが多く、故にハーンの「なんぼ」が「なんぼう」となったのだろうとのことである。ハーンは他に「如何に」も多用しているが、同義で用いているようである。

3.8 英語の干渉について

「ヘルンさん言葉」は母語である英語の干渉を強く受けている。ハーン『英語教師の日記から』によると、ハーンはあたかも日本語をある段階まで体系的に机上で学習し、日本語の、西欧語とは異なった難しさを理論的に理解しているかのように読める箇所がある。

…この英語という言語が日本人にとってどれほど難しい言語であるかは、日本語の構造に不慣れの人には想像も難いほどである。なにしろ自分自身の母語とはあまりにも違うものだから、日本語のごく簡単な言いまわしですらも字義通りの直訳では英語として意味をなさない。思考の形式をそのまま直訳しても通じない¹²⁾。

と述べているが、長男一雄に英語を教えていたときの状況やセツ宛の書簡を見ると、

ハーン自身の日本語が英語における思考の形式をそのまま転移したものであり、そこから体系的な日本語の学習はほとんどしなかったのではないと思われる。例を挙げると、

- ・ It is a dog. → それです一犬¹³⁾
- ・ This is the man all tattered and torn, that kissed the maiden all forlorn. → 破れましたと、ちぎれましたの此の男です、あの只獨りぼっちの娘を接吻しましたの¹⁴⁾
- ・ あの小さい鳥猫は小さい目が火の子のように赤いですから、火の子と名づけてやりました。→ アノ鳥子猫ニ名前モヤリマシタ。火ノ子トヨブ。デスカラ、チイサイ眼ニ火ノ子ノヨーナ¹⁵⁾
- ・ 私は梅さんが新しい家を建てたことが嬉しいです。→ ワタシ喜ブ。梅サンノ新ラシイ家ツクリマシタ。¹⁶⁾
- ・ 私は巖が速く泳ぐことを学ぶだろうと思う。→ ワタシ・オモウ・イワオ・ハヤイ・オヨグ・マナビマシヨウ。

の如くであった。一雄はハーンの子供語について

…音読が終わると和訳をしますが、この和訳たるや父独特のもので、日本語にして日本語に非ず、大概の日本人には通じない日本語です¹⁷⁾。

と述べている。

4. 「ヘルンさん言葉」の特徴のまとめ

資料 A、B、C 及び上記の考察から「ヘルンさん言葉」の特徴を語彙量、統語法、文体、習得法の面からまとめると次のようなことがいえるであろう。

ハーンのもっていた全語彙量については明確ではないが、生活言語については日本語教育における初級後半程度の語彙を保有していたと考えられる。頻用されている動詞の使用状況、他動詞の使用状況等からみて初級後半を超えることはなかったのではないと思われる。

一方で、ハーンは日本研究者であり、特に聴覚に優れた観察者であったので、教育勅語や労働歌、短歌等の聞き取りを好んで行ない、難解な概念のこともば翻訳せず、ことばそのものの響きを尊重してそのまま受容している。従って、上掲書簡や『思ひ出の記』に表れない著作関係の語彙量については不明である。

統語法の面からは標準日本語の余剰性 (redundancy) を捨てた簡略日本語であるといえる。そのピジン語としての特徴は活用語と助詞に表れている。動詞、イ形容詞、ナ形容詞ともに活用形をもっていない。習慣的に習得した masu form のほか、動詞は「dic.form です、dic.form ない」が基本形である。助詞は、係助詞「は」及び格助詞「が」の欠落の顕著な傾向、格助詞「を」の欠落が 58% 程度見られる点、ならびにそれぞれの助詞の不適切な使用等にピジン性の強い特質が表れている。一方、対象、方向、帰着点を表す格助詞「に」が適切に使用されている傾向は顕著である。活用語が活用形をもっていない

いため、並列や変化の結果の格助詞「と」が多用され、「と」の使用には明確な体系性が見られる。接続詞は「と」の造語がなされている。構文や表現はハーンの母語である英語の干渉を強く受けているが、ピジン語の一つの特徴とされる混成的な語彙が用いられることはハーンとセツの間にはほとんど全くなかった¹⁸⁾。セツがほとんど全く英語を習得していなかったためである。ハーンによる統語法の平易化、単純化は一定の法則をもっており単なる「片言」ではない。

文体については書きことばのみならず、話しことばにおいても polite style を使用していた。全般的に表現は美しく丁寧であり、士族出身のセツのことばの影響が大きいと考えられる。少ない語彙ながらことば遣いに鋭い感性を示したハーンの資質が窺える。

イ形容詞の表記における長音欠落現象やのくい（温い）、なんぼう（なんぼ）等の表記、統語法の習得程度等からハーンの日本語習得法は oral-aural method であったと考えられる。

5. ハーンの外国語習得論

ハーン日本語習得法が oral-aural method であったことを裏付ける論考をハーン自身書いている。ハーンピジン日本語が独特の「ヘルンさん言葉」と呼ばれるまでに化石化してしまった理由は5点ほど考えられる。ハーンが心酔していたクレオール語からの影響、ハーン外国語習得法、セツのフォリナー・ライティング（以下FW）ならびにフォリナー・トーク（以下FT）、ハーン在住時の日本語文体の複雑さ、ハーン社会生活ならびに社交に対する姿勢等であるが、そのうちハーン日本語習得法が oral-aural method であったことを裏付けるのはハーン外国語習得法に対する考え方である。ハーンは自身の論考のなかで次のように述べている。

…話しことばは音声による概念の伝達の原初の媒体であり、一方、書きことばは、そうした概念を耐久性のある記号で定着する技術であり、したがって、音声言語の後に発達したものであるに過ぎない。とすれば、ことばを教えるのにまず目に訴えようとするのは、事態を逆さまに始めてしまうことであり、明らかに自然に逆らっているのである。こうした誤った方法が教育機関で採られているが、その結果は、まことに嘆かわしいものである。（中略）ルイジアナのクレオール人は二カ国語一いや、ときには三カ国語を見事に操る。それは、これほど早い時期の訓練があればこそであり、それ以外のことではない。大部分の成人にとって、一つのことばに習熟する唯一確実な方法は、覚えにくく忘れやすい文法規則や動詞の変化を学ぼうとする前に、まずそのことばの話されている場所に住み、耳と口とを訓練することである¹⁹⁾。

このようにハーンは oral-aural method を推奨している。同じ論考のなかでハーンは外国語教授法のなかのナチュラル・メソッドを提唱しており、子供が言語を身につけるように成人も言語を学ぶべきであるとしている。召使、職人らが比較的短期間しか滞在し

ないその国のことばを楽に習得してしまうことがその証明だと述べ、ことばを先ず、音声的に身につけること、音声と意味の直結という点に最大力点を置いている。その後で綴字法や文法等を学び、文学の読解に入るとそれらの学習は容易になると説いているが、ハーンは召使、職人らの外国語習得の事例について彼らの習得レベルには言及しておらず、事例を出す上で緻密さに欠けると思われるところがある。ハーン自身も来日後、oral-aural method を使って日本語を習得しようと考えていただろうことが次の書簡で窺える。

…私は、最小限、一つの民族の話しことばを習得し、その民族の情緒的特質を幾分かでも解せるようになるまでは、その民族について本当のことなど書き得るものではないと考えております²⁰⁾。

しかし、ハーンはその後比較的早く、日本語は自分には習得不可能であると感じたらしいことが次の書簡でわかる。

…わたくしごとき一科学的知識もなく、この国のことばを習得して新聞が読めるようになる望みも全くない者に、一体、何ができるでしょうか。実際、わたくしが日本について、いやしくも何か書こうなどと思うことは、ほとんど厚かましい無作法であるように思われてなりません²¹⁾。

書簡を見ると、ハーンは来日後1年3か月ほどで、すでに標準日本語の習得を断念したことがわかり、ハーン日本語はかなり早い段階で上に見てきたような「ヘルンさん言葉」で化石化してしまったように思われる。それを裏付ける理由の一つとしてハーンの外国語習得論を見てきた。ハーンはフランス語やフランス語系のクレオール語に習熟しており、フランス文学の英語への翻訳や、フランス語系クレオール語による旅行メモ、童話の制作を成している。ハーンにはフランス語やクレオール語を習得した時の方法論に対する確固たる自信があったのであろう。上に引いたハーンの、ルイジアナ人の外国語習得法に対する論考を見ると、oral-aural method に対する磐石の信念が表れている。

一方、セツはハーンに対して資料B、Cで見たようにFW、及びFTを生涯使っていた。セツのFW、FTについては別稿に詳述した²²⁾のでここでは述べないが、ハーンの著作物の制作に非常な貢献をするものであった²³⁾と同時に、日本語教育の視座から見るとハーンのピジン性の強い日本語を化石化させる役割を果たしたものであったことがいえると思う。

6. おわりに

本稿では、ハーンの原文日本語書簡6通ならびに『思ひ出の記』に見られる活用語と助詞を中心に語彙調査を行うことにより、「ヘルンさん言葉」のピジン性について検証し、その他の特質についても考察した。その結果、動詞の異なり語数は約145、イ形容詞は45、ナ形容詞は25出現し用語遣いには著しい特徴が見られること、助詞の欠落が対象、方向、存在の場所、時等の「に」を除き顕著であること、動詞、イ形容詞、ナ形

容詞には活用がなく、その運用には一定の規則が見られること、接続詞「と」を造語したこと、統語法が英語の構文そのままの文章も多いこと、セツのことばの影響を受けて丁寧な上品な表現が多いこと、松江ことばも混じっていること、以上の運用は体系的であり、そこから「ヘルンさん言葉」は単なる片言ではなく一定の規則をもった体系的な言語であることがわかった。ピジン性は語彙量よりも標準変種の本質的でない特徴を捨て去っていること、すなわち、活用語に活用がないことや助詞の顕著な欠落ならびに英語構文の日本語、造語等に強く表れていることがわかった。一方でピジン語の一つの特徴とされる混成的な語彙は、セツがほとんど全く英語を知らなかったため成立しなかった。更にハーンの日本語習得法は oral-aural method であり、自身の論考のなかで体系的な机上の学習を否定しており、それがハーン自身の日本語に影響を与えたことが確実にあることがわかった。

書簡は原文未公開のものがまだ多くあり、内容は修正版書簡から推測するしかないが、昭和2年公開の21通のセツ宛修正版書簡及び玉木光栄に宛てた原文書簡も全て焼津発であり、話題は海、海水浴、水泳練習、息子たちの日々の様子、焼津の町のありさま、近所の人々の消息等に集中している。原文で使われていた語彙もそれら話題のための同様の語彙であったことは推測できる。一方『思ひ出の記』に記録され、我々が目にするのできる話題にしても限られているゆえに、実際にハーンが知っていて使えた語彙の全容は明らかではない。しかし、語法や表現法や構文等から推測すると、生活言語における語彙量は日本語教育における初級後半程度、文法体系は標準日本語とは全く別の一体系をなしていたと考えられる。

註

- 1) 林正寛「フーゴ・シューハルトとラフカディオ・ハーン—ピジン・クレオール語研究の曙—」『女子美術大学紀要』第14号 1984 注記の項参照。
- 2) 幕末から明治期にかけて横浜にあった居留地で話されていた日本語。『Exercises in the Yokohama Dialect』1874, 1879 に詳述されている。
- 3) ロレット・トッド (Loreto Todd) 著、田中幸子訳『ピジン・クレオール入門』大修館書店 1986 5-6 頁、34 頁
- 4) 平川祐弘監修『小泉八雲事典』恒文社 2000, 560 頁 (村松眞一著) ハーンが焼津からセツに宛てた手紙を三成重敬が模写したものが紹介されている。表記は漢字かな交りに改められており、「チイサイ」等文章そのものが修正されている箇所もある。
- 5) 例えば村松眞一「焼津におけるハーン関係資料」『人文論集』静岡大学人文学部 No.39 1988 125 頁 「それは稚拙な、片言のような日本語であるが…」
平川祐弘『小泉八雲 西洋脱出の夢』講談社学術文庫 1994 30 頁。「妻の節子も夫と話す時は、夫の片言流の日本語を自分も使ったのである。」
遠田勝「書簡が語る八雲の生涯」『無限大』No.88 1991 184 頁「彼の気に入るような話をセツが古い書物や雑誌などで見つけてきては、「ヘルンさん言葉」という片言かたごえの日本語でハーンに語り聞かせていたのである。」など。
- 6) 萩原朔太郎『小泉八雲の家庭生活』(ちくま日本文学全集『萩原朔太郎』所収) 筑摩書房 1991 337 頁

- 7) 動詞の中には「よろす」「のくう」等も含めたため、明確な数は不明であるので約とした。
- 8) 大島三郎訳『シーボルトよりーシーボルトへーシーボルト書簡集』都文堂書店 1931 表紙裏に掲載された書簡参照。
- 9) 小泉セツの『思ひ出の記』講談社学術文庫『小泉八雲と研究』1992 所収、32 頁に「(ヘルンは) 女よりも優しい親切なところがありました。ただ幼少の時から世の悪者共に苛められて泣いて参りましたから、一國者で感情の鋭敏な事は驚く程でした。」とあり、語彙が少ないうえにことばの使い方は繊細なことが窺われる。
- 10) 2002 年 10 月 7 日電話による松江市役所観光文化課の談話。
- 11) 2002 年 10 月 7 日電話による小泉凡氏の談話。
- 12) 小泉八雲『英語教師の日記から』(平川祐弘編『明治日本の面影』所収) 講談社学術文庫 1990 34～35 頁
- 13) 小泉一雄『父「八雲」を憶ふ』(『小泉八雲作品集』12 巻) 恒文社 昭和 42 年 239 頁
- 14) 註 13) に同じ。
- 15) ハーンが 1904 年 7 月 25 日に焼津からセツに宛てた書簡を、三成重敬が漢字かな交りに改めた。例文の箇所は表記以外は概ね原文であるようだが、「チイサイ」の箇所に修正が加わっているようである。
- 16) 出典 15) に同じ。三成重敬が漢字かな交りに改めた。
- 17) 註 13) に同じ。
- 18) 『新英和大辞典』第 6 版 研究社 2002 1867 頁によると、ピジン語について「異なった言語の話し手の間で意思疎通のために用いる(国際)補助言語; 主に一つの言語を基底に、単純化した文法、限られた混成的な語彙を用いる。」と定義されている。
- 19) ラフカディオ・ハーン『ラフカディオ・ハーン著作集』第 4 巻「言語学習における目の効用、耳の効用」恒文社 1987 312、315 頁
- 20) ラフカディオ・ハーン『ラフカディオ・ハーン著作集』第 14 巻「書簡」恒文社 1983 367 頁 1890 年 4 月 4 日バジル・ホール・チェンバレン宛の書簡。
- 21) 前掲書 414 頁 1891 年 7 月 25 日バジル・ホール・チェンバレン宛の書簡。
- 22) 金沢朱美「小泉八雲の日本語についてー日本語教育の視座からー (1)」目白大学人文学部紀要「言語文化篇」第 6 号 2000
- 23) 小泉節子『思ひ出の記』(平川祐弘編『小泉八雲 回想と研究』所収) 講談社学術文庫 1992 39～40 頁に「私が昔話をヘルンに致します時には、いつも始めにその話の筋を大体申します。面白いとなると、その筋を書いて置きます。それから委しく話せと申します。それから幾度となく話させます。私が本を見ながら話しますと、「本を見る、いけません。ただあなたの話、あなたの言葉、あなたの考でなければいけません」と申します故、自分の物にしてしまっただけならなりませんから、夢にまで見るやうになって参りました。」とある。

(かなざわ あけみ 目白大学)